

ダブルテンスの観点からみた 〈スルコトガアル〉の種々相

高 橋 太 郎

1. 問題と、ここであつかう対象のはんい

(1) ダブルテンスとは

ダブルテンスとは、そのなかにふたつのテンス形をもつ述語形式のことである。これは、高橋1993「ダブルテンス研究のすすめ」で提起した定義であるが、このテーマでの研究は、そこでものべたように緒についたばかりで、まだ厳密な定義ができる段階ではないので、うえの定義は、「……もつ述語形式、またはそれに準ずるもの」ぐらいにしておくのが無難だろう。高橋1993では、「おきる様子もない」,「はたらいたにちがいない」,「たかくなるはずだった。」,「かわったそうだ」,「わかれることになる」,「やめたほうがよい」,その他にふれたが、今回は「スルコトガアル」をとりあげる。

(2) 文のくみたてのなかでの「スルコトガ」の性格

「スルコトガアル」は、「スル」と「アル」がそれぞれ「シタ」,「アッタ」のように活用するテンス形であるので、これをダブルテンスとしてとりあげるのであるが、これが述語形式またはそれに準ずるものといえるかどうかについては、いちおう検討しておかなければならない。なぜなら、この形式が、もし主語「スルコトガ」と述語「アル」によってくみたてられた構造であるとすれば、述語形式とあまりにもかけはなれているからである。

これについては、高橋・屋久1984「『～がある』の用法」がくわしく論じて

いるので、特に関係のふかいところだけを紹介しておく。そこでは、その用法を5種類にわけているが、今回の論文に関係があるのは、「IV 所有されるもの、所属するものとしての存在」と「V 経験としての存在」で、これらは、「I 空間的な存在」のばあいには「右の壁際に鏡つきの高い帽子掛があった。」(宮本百合子「伸子」)のように場所名詞のニ格がくる位置に、ひと名詞がきて、しかも、それが「～ニハ」をへて「～ハ」のかたちに変化している。

- ・竜岡には昔気質がある。(志賀直也「暗夜行路」)
- ・先生は座敷から此椿の花をよく眺める癖があった。(夏目漱石「こころ」)
- ・奥さんは滅多に外出した事ありませんでした。(こころ)

そして、述語との尊敬語の照応が、ガ格の名詞とのあいだでなく、「～ニハ」または「～ハ」のかたちをとった名詞とのあいだに成立する。

- ・あのかたには財産がおありだ。
- ・あなたはごらんになったことがおありですか。

つまり、Iで、存在の主体をあらわして主語の座をしめていたガ格が、IV、Vでは、所有の対象(所有物や経験)をあらわす補語におち、かわりに「～ハ」が主語の座をうばうことになる。「～ニハ」は、その中間段階にあるものである。))

(3) 「スルコトガアル」の単位性

以上、所有や経験のばあいにはガ格の名詞が主語の座をゆずることについてのべたが、そのことは、ガ格の名詞が述部の一員になるところまでで、動詞とくんで述語形式をつくることまでを意味するわけではない。「スルコトガアル」の形式をとっていても、つぎの諸例のように「コト」が、なにか抽象的なコトガラをあらわしていて、連体句がそれになんらかの特徴づけをほどこしているばあいは、「スルコト」が存在の主体として、「アル」から独立した文の部分となっている。

- ・いろいろ家の事情をかんがえると、どうもわが輩の思うようにばかりも
いかないことがあるんで—(島崎藤村「破戒」)

- ・小弓は肩に手をかけられて、ようやく目をあけた。そのとき小弓の感じたことがある。(三島由起夫「橋づくし」)
- ・でも、ひとつだけ解らないことがあります。(立原正秋「くれない」)

この三文は、いずれもナニカが存在することをあらわして、「スルコトガアル」がひとまとまりになって述語相当になっているとはいえないだろう。

「小弓の感じたこと」というのは、＜小弓がナニカを感じた＞そのナニカであり、「ひとつだけわからないこと」というのは、＜ナニカがひとつだけわからない＞そのナニカである。それぞれそのひとつずつ独立した＜ナニカ＞と「アル」が文のレベルで結合して、ナニカが存在することをあらわしているのである。

しかし、つぎの三文では、「コト」がナニカをあらわしているのではなくて、「コト」はカテゴリゼーションの形式名詞として、そのまえの動詞句を名詞化している¹⁾。動詞句が「コト」をくわしくしているのではなくて、「コト」が、動詞句をひとまとめにして、それを名詞的な意味と機能をもつものにかえている。つまり名詞的なカテゴリーに属するものとして、まとめなおしているのである。

そして、さらに、それが「アル」とくみあわさることによって、「スルコトガアル」がぜんたいとして、あたらしい意味をおびてくる。

- ・玉枝を女房にできたら……喜助はそのことを夢にみることがあった。
(水上勉「越前竹人形」)
- ・僕は、むかし、この道路で喧嘩をしたことがある。(立原正秋「帰路」)
- ・何でオレが謝るんだ。本当のことって、あやまることないだろう。
(向田邦子「続あ・うん」)

「そのことを夢にみること」、「喧嘩をしたこと」、「あやまること」などは、その＜ナニカ＞がはいるすきまがない。「～シタコト」は、＜～シタ＞という動作を「コト」が名詞化しているにすぎないのである。そして、「……コトガアル(ナイ)」も、意味のまとまりとして、＜ナニカ＞の存在(不存在)をあらわしているのではないのである。

(142)

これらの文では、「スルコトガ アル」「シタコトガ アル」「スルコトハナイ」が、それぞれ<ときどきみる>、<喧嘩をした経験をもつ><あやまる必要はない>というふうに、単なるタシザンでなく、あたらしい意味にかわっている。つまり、文のレベルで両者が独立の単位として結合するのではなく、そのまえのレベルで結合して、文のレベルでは、その結合したものがひとつの単位として登場するのである。だから、これを述語相当の単位だというわけである。

なお、「シタイコトガアル」や「シナケレバナラナイコトガアル」は、かなりおおくの例文をもつパターンであるが、<ナニカガアル>のほうのグループに属するものである。

- ・小僧さん、たいそう学者だな。じゃあ少し聞きてえことがあるんだ。いろはのいの字へ濁りを打つとなんというんだ。(三遊亭金馬「居酒屋」)
- ・いまふっと思い出したんですがね、わたしにも江戸へ帰ったら、さっそくやらなくちゃならないことがある…(井上ひさし「江戸の夕立ち」)

(4) この論文があつかう四形式

この論文では、ダブルテンスの述語形式として、つぎの四形式をあつかう。

- ・経験のあることをあらわす「シタコトガアル」
- ・ときどきおこることをあらわす「スルコトガアル」
- ・必要のないことをあらわす「スルコトハナイ」
- ・理由であることをあらわす「スルコトモアッテ」

ここにカタカナでしめした四つのかたちは、それぞれの形式の代表的なパターンである。どの形式も、それぞれのパラダイムをもっていて、そのなかにかくつかのパターンがある。そのことは、各章でのべる。

なお、形式的にここのグループにひっかかっている「あることはある」というパターンがある。

- ・箱が水の上をすべって行く。船といえたしろものじゃない。というのは、その下にはほとんど水が無いにひとしいからだ。いや、水はあることは

ある。箱をうかべるには十分たっぷりして、かなり深く、(石川淳「おまえの敵はおまえだ」)

しかし、これは、つぎの例と同様、その代表的なパターンは「スルコトハスル」であって、グループをことにするので、ここではあつかわない。

- ・石原も女を見ることは見たが、只美しい女だとおもっただけで、意に介せずにしまったらしかった。(森鷗外「雁」)

2. 経験のあることをあらわす「シタコトガアル」

(1) この形式の主要なパターン

経験のあることをあらわす「シタコトガアル」は、第一テンス形が過去形になることが義務的な成立条件であって、第二テンス形は、非過去形でも過去形でもよい。

- ・二十二歳のときおれは一年ちょっと江戸でぶらぶらしていたことがある。(井上ひさし「手鎖心中」)
- ・いつかお姉さんにお目にかかった事があります。(阿川弘之「年年歳歳」)
- ・かつて、日の光にきらめく川面を美しい、と思ったことがあった。(津島佑子「火の河のほとりで」)
- ・やっぱり暮れ方でしたな…へい、一つ目の橋の上で十七、八の娘でしたが、たしかにお助けしたことがございました。(三遊亭金馬「佃島」)

第二テンス形がうちけしになるものもおおい。

- ・ぼくはサインなんてしたことないよ。(北杜夫「さびしい乞食」)
- ・そんなこと……もったいなくて、考えたこともありません。(夏樹静子「白い影」)
- ・慎也自身は彼の作品を読んだことはなかったが、(森村誠一「終着駅」)
- ・素より貴方に対してそんな事を考えた事はございませんでした。(志賀直也「赤西蛸太」)

(144)

第一テンス形がうちけしになるものは、ひじょうにすくないが、ないわけではない。

- 同じアパートの居住者に聞くと、これまでも数日ふらりと出かけたまま帰って来なかったことがあったという。(終着駅)

こうしたことから、この形式の主要なパターンは、つぎのよつつといえる。

- シタ コトガ アル
- シタ コトガ アッタ
- シタ コトガ ナイ
- シタ コトガ ナカッタ

(2) ダブルテンスとしての性格

この形式の第一テンス形は過去形で、それが過去のことであることをあらわし、絶対的なテンスとして実現している。いっぽう、第二テンス形は、積極的なテンス的意味をあらわさない。そして、それが非過去形であろうと、過去形であろうと、テンス的な意味にはかわりがない。したがって、この章にいままであげてきた例は、いずれも、第二テンス形の「ある(ない)」を「あった(なかった)」に、「あった(なかった)」を「ある(ない)」にかえても、テンス的な意味はかわらない。これが、経験をあらわす「シタコトガアル」形式のダブルテンスの特徴である。

なお、うえの諸例のなかでひとつだけ、「さびしい乞食」の例は「サインなんかしたことなかったよ」にかえると、すこしふしぜんになるが、これは、テンス的意味の問題でなく、文体の問題だろう。(4)でのべることとあわせて、かんがえてほしい。

(3) 経験をあらわす「シタコトガアル」と「シテイル」

「経験をあらわす形式」としては、この章の形式のほかに、継続相「シテイル」の、いわゆる「経験・記録をあらわす用法」がよくとりあげられる。

- かれは二十代に画期的な論文をかいている。
- かれは一度彼女と結婚している。

この二例は、それぞれ「かいたことがある」、「結婚したことがある」にいい

かえることができる。このように、この両形式は、共通する性格をそなえているのであるが、それぞれの典型的な意味はことになっており、使用例をみても、いいかえるとふしぜんになるものがおおい。

「シタコトガアル」は、むかしからいままでというひとつの時間帯のなかで、そのことがおこったことをあらわすだけで、その結果が、いまというもうひとつの時間位置で経歴になっているかどうかをとわない。それに対して、経験・記録の「シテイル」は、そのような経験をもつこととあわせて、それが経歴になっていることまであらわす。この用法はパーフェクトの一種であり、運動が成立したことと、その結果がのこっていることを同時にあらわすのである²⁾。

つぎのように経歴になりえないことは、「シテイル」にかえることができない。

- わたしもお腹がすいて、橋から身投げをしようと思ったことがありますのです。(三遊亭金馬「唐茄子屋」)
- あなたは水の中で眼を開いたことがありますか。(北条民雄「いのちの初夜」)
- 時々、俺もわけのわからないことで怒られて、めんくらったことあるんだ。(津島佑子「火の河のほとりで」)

また、つぎのように、その結果が経歴や記録になることをあらわすのをさけられないものは、「シタコトガアル」にかえることができない。

- 昨年の大会では、A高が優勝している。
- かれは大学をでている。

つぎのようなものは、コトガラに対する意味づけのしかたによって、どちらの形式をもとることができるであろう³⁾。

- 志麻子はもともと妊娠しにくい体質だったが、今から約三年前に、一度だけ身籠ったことがある。(夏樹静子「訃報は午後二時につく」)
- 名古屋へは学生時代に一度だけ来たことがある。(訃報は)
- ところが喜助は瞬間、どこかでこの女をみたことがあるような気がした。(越前竹人形)

(4) 「シタコトガアル」と「シタコトガアッタ」

「シタコトガアル」と「シタコトガアッタ」とは、テンス的な意味がおなじである。しかも、たいていのばあいには「アル」と「アッタ」をとりかえることができるということは、その他の点でも、ひじょうによくにているということであろう。いまのところ、そのちがいがなにであるか、よくわかっていないが、たぶんテキスト論的なアプローチもふくめて分析する必要があるだろう。

今回でもとにあるデータを、日常語的か文章語的か（会話文と地の文のどちらにおおくでるか、格やとりたての助辞のつかないものがあるか）、文中で時間の状況語と共存するかどうかの観点からながめた結果はつぎのとおりである。なお、両表は、おなじ出典群からとった、ぜんぶのデータのかずなので、（地の文と会話の比率が一般を代表しなくても、）両表の比較は意味をもつ。

この両表からは、つぎのようなことがいえる。

①出現頻度は、「シタコトガアッタ」より「シタコトガアル」のほうがたかい。

②会話にあらわれる比率は、「シタコトガアル」が圧倒的におおく、「シタコトガアッタ」よりも日常語的であるとおもわれる。

③時間の状況語との共存の比率は、「シタコトガアッタ」のほうがずっとたかく、時間の状況語があるという文環境が第二テンスに過去形をよぶ場をつくりだしているのではないかとかんがえさせられる。

・東京に来る前にも、一度、散歩したことあったね。（火の河の）

シタコトガアル

	地の文	会話文(コトガアル)	会話文(コトアル)	合計
状況語アリ	59(48)<69>	26(23)<31>	0(0)<0>	85(35)<100>
状況語ナシ	65(52)<41>	87(77)<54>	8(100)<5>	160(65)<100>
合計	124(100)<51>	113(100)<46>	8(100)<3>	245(100)<100>

シタコトガアッタ

	地の文	会話文(コトガアッタ)	会話文(コトアッタ)	合計
状況語アリ	57 (55) < 83 >	10 (42) < 14 >	2 (100) < 3 >	69 (53) < 100 >
状況語ナシ	47 (45) < 77 >	14 (58) < 23 >	0 (0) < 0 >	61 (47) < 100 >
合計	104 (100) < 80 >	24 (100) < 18 >	2 (100) < 2 >	130 (100) < 100 >

なお、会話文の「シタコトガアッタ」には、③の例文や1)の第4例のように、確認のやりとりにつかわれるものがおおい、もうすこしあげる。

- 昔、ほら、お母さんと、光ちゃんと、一夫さんで、箱根の塔の沢へいったことがあったわね、(中略)おぼえていらっしゃる? (林芙美子「めし」)
- 川上さんは昔、高校生の時、あたしを警視庁の玄関で待っててくれたことがあったでしょう。(つかこうへい「スター誕生」)
- その問題について、沢野さんと話合いをされたことはなかったのですか。(夏樹静子「螺旋階段をおりる男」)

この問題は、今後他の形式グループをみたあとで、あつかってみたい。

3. ときどきおこることをあらわす「スルコトガアル」

(1) この形式の主要なパターン

ときどきおこることをあらわす「スルコトガアル」は、第一テンス形が非過去形になることが義務的な成立条件であって、第二テンス形は、非過去形になるものと過去形になるものがある。

- トロッコで運んでくる石炭の中に拇指や小指がバラバラに、ねばって交ってくることがある。(小林多喜二「蟹工船」)
- どうかするとお天気の好い日には、遠い伊吹山まで見えることがありますよ。(島崎藤村「夜明け前」)

(148)

- 朝の目覚めた街。小さな開いた窓の中に、小人のような人間の姿を認めることもあった。(福永武彦「飛ぶ男」)
- 杉山は仕事の関係で、帰る時間は不規則でした。どうかすると朝の二、三時になり、泊まって来ることがありました。(大岡昇平「焚火」)

第一テンス形や第二テンス形がうちけしになることもある。

- 「お定、きょうは幾日だっけねえ」と、日も御存じないことがある。(島崎藤村「旧主人」)
- パチンコ・ワナにかかったネズミが朝になるとイタチに食いちぎられて首だけしかのこっていないこともあった。(開高健「パニック」)
- せめておかあさんを一度どこかへ連れて行ってあげなさいよ。小父さんがあのお身体だから、なかなかおもてへ出なさることもないのよ。(年年歳歳)

この形式の主要なパターンをつぎにしめしておく。

- | | |
|-----------|-------------|
| • スルコトガアル | • スルコトガアッタ |
| • スルコトガナイ | • スルコトガナカッタ |

(2) ダブルテンスとしての性格

この形式の第一テンス形は非過去形で、第二テンス形のしめす時間を基準とする相対的なテンスとして実現している。このテンス形がしめすコトガラは、特定の時間位置に局在するものでない点において、ポテンシャルであるといえる。「とまってくることがあった」というのは、第二テンス形「あった」のしめす過去の、ひろげられた時間帯⁴⁾のなかの不特定時間に<トマツテクル>という運動が成立することをあらわしている。この形式の第二テンス形は絶対的なテンスとして実現する。過去形「アッタ」は基準時間が過去であることをしめし、非過去形「アル」は、基準時間が現在、未来、不特定時間のいずれかであることをあらわしている。これが、ときどきおこることをあらわす「スルコトガアル」形式のダブルテンスの特徴である。

(3) この形式の内容

この形式の名まえとして、「ときどきおこることをあらわす形式」というのは正確でない。たとえば、つぎの例は、ときどきおこるというより、可能性が実現することをあらわすといったほうが適切だし、(1)の最後の例は、ときどきおこることを否定しているというより、一度としておこることがないことをあらわしている。

- 何かのはずみで今迄見えなかったものが、突然見えて来ることがあります。(あ・うん)

これらをひっくるめた適切な名づけかたがみつからなかったので、いちばん例のおおい用法を代表として、この形式を名づけたのである。

この用法で第二テンス形が非過去形のばあい、(1)のおおくの例のように、ひろげられた現在の時間帯での実現、(1)の最後や、このすぐ前の例のように、可能性の実現をあらわすもののほか、つぎの例のように、未来での実現をあらわすものがある。

- 何もそんなに案じるにも及ぶまい焼棒杭ヤケボックイと何とやら、又よりの戻ることもあるよ。(樋口一葉「にごりえ」)

それでも、肯定のばあいは、「ときどきおこること」の名のもとに、いろいろのものをあつめておいてもよいが、否定のばあいには、それぞれの性格がはっきりあらわれるので、下位分類しておいたほうがよいだろう。

①ときどきおこることをうちけす。

- 女と男の違いのためか、姉からはあまり父を思い出させられることがなかったらしい母は、(野口富士男「かくてありけり」)
- 現在はA C Dの三倉庫が主に使われており、裏の南門に近いB倉庫は滅多に開かれることもない。(清水一行「乗取り」)
- 祖母は牧の部屋を訪ねて来ても、遠慮して長居しようとしなかったが、司の家族のもとにも、ゆっくりしていくことはないようだった。(火の河の)

(150)

②実現することをうちけす。

- ・だから止むを得ないし、これで終わりだから、選挙の仕事ではもう桜田さんにお目にかかることはありませんね…。(清水一行「企業爆破」)
- ・けれども、“東京行き”はその後両親の会話に二度とでることはなかった。(林真理子「胡桃の家」)

③実現の可能性をうちけす。

- ・つまり教授の個人的な顧客なのだから、とても大事にされていて、個人的な面談を申し込めば断られることもない。(倉橋由美子「ポポイ」)
- ・彫刻ならば、どんなに古くなっても、蒔絵のように消えることはございませんし、それに、(住井すゑ「わたしの童話」)

(4) 「スルコトガアッタ」と「シタコトガアル」

「スルコトガアッタ」の使用例をみていると、(しぜんさの度合はいろいろあるとしても,)「シタコトガアル」にいいかえられるものが大半である。

- ・自分で車を呼んで出かけるものもあったが、時には佐々木ガホテルの車を運転してモンテカルロのカジノまで送迎することもあった。(平岩弓枝「花ホテル」)

→ 送迎シタコトモアル

- ・たまにパリにたちよることもあったが、それも仕事の上でだった。(帰路)

→ タチヨッタコトモアル

しかし、逆に「シタコトガアル」の使用例をみても、「スルコトガアル」にいいかえられるものはあまりない。これは、「シタコトガアル」形式がときどきおこった経験をあらわすこともできるため、その種のものだけが「することがあった」へのいいかえの可能性をもつわけである。

- ・よく南嶽も入れて三人で呑みあかしたこともあるから、里子は落ちつけた。(水上勉「雁の寺」)

→ 呑ミアカスコトモアッタ

- ・四十五, 六の, 腹の出っ張った磊落(ライラク)そうな人物で, 夕子とはすでに何度も顔を合わせたことがある。(白い影)

→ 合ワセルコトガアッタ

4. 必要のないことをあらわす「スルコトハナイ」

(1) この形式の主要なパターン

必要のないことをあらわす「スルコトハナイ」は, 第一テンス形が肯定の非過去形であり, 第二テンス形は, うちけしの非過去形または過去形である。

- ・里子も子供じゃアないんだから。一人で帰せばいいんだぜ。君が送ってゆくことはないよ。(めし)
- ・なあに, すっぱぬかれても羞かしがることはないさ。(わたしの童話)
- ・銭湯があるのならホテルを移ることもなかった。(帰路)

ダブルテンスの観点からみると, 第一テンス形は, 「コト」とくみあわさって名詞句をつくる過程でテンス的な意味から解放され, 第二テンス形は, 終止形として絶対的なテンスを実現しているが, そのなかで, 過去形は, 事実のレベルで非現実な評価的な意味をあらわしている。

この形式の主要なパターンとして, つぎのふたつがたつ。

- ・スルコトハナイ
- ・スルコトハナカッタ

(2) この形式のはなしことば性

この形式は, 主としてはなしことばで「そのようにする必要がない」ということをあらわすのにつかわれる。

- ・お琴の稽古にゆくのに, よそゆきのハンドバッグ, もってくことないだろ。(あ・うん)
- ・急ぐこともないよ。どうせ, 大して変われやしないんだから。(火の河の)

- でもね、数字のおおきさに驚くことはないと思うよ。数字なんて、人間の発明品だもの。単位の決め方でどうにでもなる。(尾崎一雄「虫のいろいろ」)

この形式は、はなしことばにつかわれるもので、「こと」につく助辞が、うえの第一例のように省略されたり、つぎの例のように、まえの音節と融合したりするものがすくなくみうけられる。

- なにも豆腐屋^ななる事アねえじゃねえか。(三遊亭小圓朝「千早振る」)
地の文につかわれても、つぎの例のように、登場人物(または、かきて)のかんがえのなかみをかくのにつかわれるのがふつうである。

- そしてそのことに本人はまだ気づいていない。急いで気づかせることはない。彼女がその事実気づいたときは、自分の支配の網から出て行ってしまふ。(終着駅)

(3) この形式の内容

この節のタイトルには、この形式が、そうする必要がないことをあらわすとかいたが、せまい意味で必要の不要をのべるのは意志動詞のばあいであって、うえの第三例のように、無意志動詞がつかわれるばあいには、しぜんにならうという心的傾向に対して、それが不要だという評価をのべている。

無意志動詞がつかわれる例は、ぜんたいの半数ちかくあって、この形式の用法のなかでおおきなウェイトをしめている。なかでも「心配スルコトハナイ」と「気ニスルコトハナイ」は、かなり頻度がたかい。

- それにたとい打ちに来たところで、私達は素早く逃げればそれでいいんだもの、ちっとも心配することはないわ。(わたしの童話)
- ああ大丈夫だ。気にすることない。(スター誕生)

せまい意味の必要をあらわすばあいには、これからすることについてのべるのがおおいのに対して、こちらは、すでにその状態が生じている、あいてに対して、なだめたり、ひやかしたりするのに、よくつかわれる。

- 泣くことはない、それでよかったんだよ。(山本周五郎「いさましい話」)

- 何も赤くなることないじゃない。結婚しているんでしょう。(森瑤子「ドラマティック・ノート」)

この「スルコトハナイ」形式は、文法のがわからみると、評価にかかわる現実認識をあらわしているが、使用の点からみると、一、二人称のばあいは、ぜんたいとして、＜やめろ＞＜しないでおこう＞につながるような当為の表現につかわれることのほうがおおいようである。

(4) この形式の過去形の性格

この形式は、過去形「スルコトハナカッタ」になると、過去の行為に対して否定的な評価をあたえるものとなる。「スルコトハナカッタ」の文字どおりの意味がしめすのは、そのような事実は存在しなかったということであるが、じっさいには、その事实在存在したのであるから、この「スルコトハナカッタ」というのは反現実の表現に属する。はなしてなり登場人物なりが、評価の結果、＜「過去にそれをしたのは、よけいなことであった。そんなことしなければよかったのに。＞となげいているのである。文法的には評価の形式であるが、使用の点からみると、一人称は反省、二人称や三人称はなじりの要素をおびることがおおい。

- なんだって、あの子は死んでしまったのだろう。死ぬことはなかったのに。(火の河の)
- そのうちに自分のことがひどくおかしくなって、私は眩きを笑い声に変えた。踊りをことわるために、何もずぶ濡れになることもなかったのだ。まるでティーン・エイジャーの娘みたいに、おびえたりした自分がおかしくてならなかったのだ。(森瑤子「別れ上手」)
- 元村 だって、そうじゃないか。われわれだってげんに渡君のあとからついて来たんじゃないか。
佐原 そうだとしても、見ず知らずのビッコのじいさんなんぞにそれを
いって聞かせることはなかった。(おまえの)

過去形のこのような用法があるのは、評価的あるいは、当為的な形容詞の過

去形と共通である⁵⁾。

(5) この形式のパラダイムの性格

この節であつかっている〈必要のないことをあらわす〉「スルコトハナイ」「スルコトハナカッタ」は、みとめかたのうえで対立する「スルコトガアル」「スルコトガアッタ」という肯定形式をもたない。いままであげた例をむりに肯定形式にして、「急ぐことがある」「心配することがある」「赤くなることもある」などにかえてみても、〈必要のあることをあらわす〉形式にはならない。

このことは、この用法でない「スルコトハナイ」「スルコトハナカッタ」とことなるのである。たとえば、つぎの例のようなものならば、それぞれそのあとの∴のようなものと、みとめかたの点だけで対立するのである。

- ・しかし、苦勞もこれ限りというのであれば、これ以上申しあげることが ございません。 (帰路)

∴しかし、……というのでなければ、さらに申しあげることが ござい ます。

- ・川風が吹いていなくて、歩きながらライターの火をつけることができる状態だったら、土井が車に眼を投げることはな かなか たら らう。 (勝目梓「鬼畜の宴」)

∴おなじ状態だったら、土井でなくても、車に眼を投 げることがあ っ たら らう。

したがって、この節であつかっている形式は、「スルコトガアル」「スルコトガアッタ」の否定のパターンではなくて、まさに「スルコトハナイ」「スルコトハナカッタ」という形式なのである。

5. 理由をあらわす「スルコトモアッテ」

- (1) 中止用法になって、理由の意味がくわわること

中止形や接続形（接続助辞のついたかたち）は、文中で主文や文の述語に先行するために、従属性をおびることがある⁶⁾。

- おおあめがふって、洪水になった。
- カニはハサミがふたつあるが、一方が他方よりおおきい。
さきに2. や3. でのべた形式も、文の述語につかわれなかったばあい、この伝で理由をあらわすことになることがある。
- 雪州は僧堂を燈全寺で送ったこともあって、慈海とは雲納仲間であった。
(雁の寺)
- 吉左衛門は（中略）諸街道問屋の一人として江戸の道中奉行所へ呼び出されることがあって、そんな用向きで二三度は江戸の土を踏んだこともある。（夜明け前）

(2) 理由をあらわす形式の成立

この、文を中止する形式が理由をあらわす形式として独立すると、そのことによって、2. や3. であったころの意味からずれた、理由の意味が成立することになる。つぎの三例は、それぞれ、いまのいままで九州にいたのであり、いつもとぼけてきこえるのであり、ゆくさきずっとじゃまになりつづけるのであって、いずれも、もとの形式の意味からずれている。

- 九州に育ったこともあるが、淳子のまわりで、子どものうちからスキーをやったものなどいない。（林真理子「女ともだち」）
- 喋り方は奇妙に悠長で、とぼけているみたいに聞こえることもあって、別にとりわけシャープな印象というのでもなかったのだが……。 （夏樹静子「予期せぬ殺人」）
- 自分のような者を親にもってては、ゆくさき邪魔になることもあろうから。（山本周五郎「いさましい話」）

さらに、つぎのようになると、理由以外の意味にはとれなくて、2. や3. の一部ではない、独立した形式をみとめざるをえなくなる。

- 商工会議所に勤める源吉は、事務員が五人しかいないこともあって、こ

ういうお祭りはたいてい中心になって切りまわしている。(胡桃の家)

- 和久井にふつうの勤めができないこともあって、伊丹が自宅へ通わせ、
事務員兼雑役夫に使っていた。(夏樹静子「片隅の青い絵」)

これらの文は終止形にして文の述語にすることができない。つぎのように「理由」という語彙的な手段にささえられるのは、べつの形式になったことを意味する。

- ……理由としては、事務員が五人しかいないこともある。

(3) この形式の主要なパターン

この形式は、(ひろい意味での) 中止機能のなかでしか成立しない。したがって、第二テンス形は、テンス形でないものに変容してしまっている。主要なパターンとして、つぎのふたつをかかげておこう。

- スルコトモアッテ
- シナイコトモアッテ

6. 諸形式のダブルテンスのありかた

ここで、諸形式の主要なパターンをかかげて、ダブルテンスの性格をまとめておく。[() 内は略称]

- 経験のあることをあらわす「シタコトガアル」(経験)
 - シタ コトガ アル
 - シタ コトガ ナイ
 - シタ コトガ アッタ
 - シタ コトガ ナカッタ
- ときどきおこることをあらわす「スルコトガアル」(時々)
 - スルコトガアル
 - スルコトガナイ
 - スルコトガアッタ
 - スルコトガナカッタ
- 必要のないことをあらわす「スルコトハナイ」(必要)
 - スルコトハナイ
 - スルコトハナカッタ
- 理由であることをあらわす「スルコトモアッテ」(理由)
 - スルコトモアッテ
 - シナイコトモアッテ

(理由) は、いろいろなものからきていて、第二テンス形がひろい意味の中止法になっていることをのぞけば、みとめかたも、第一テンス形のテンスもさまざまなので、考察の対象からはずす。

(1) みとめかたについて

- (経験) と (時々) は、とくに制限はない。
- (必要) は、第一テンス形がみとめ、第二テンス形がうちけしである。

(2) 第一テンス形のテンス形式について

- (経験) は、第一テンス形が過去形である。
- (時々) と (必要) は、第一テンス形が非過去形である。

(3) 第二テンス形のテンス形式について

- (経験) も (時々) も (必要) も、非過去形、過去形のどちらかがつかわれる。

(4) 第一テンス形のテンス的な意味について

- (経験) は、絶対的テンスとして実現し、過去のことをあらわす。
- (時々) は、相対的テンスとして実現し、同時のことをあらわす。
- (必要) は、第二テンス形が非過去形の場合は、絶対的テンスとして実現し、現在、未来、または一般時のことをあらわし、第二テンス形が過去形の場合は、相対的テンスとして実現し、同時のこと(、つまり、発話時を基準にすれば、過去のこと)をあらわす。

(5) 第二テンス形のテンス・ムード的な意味について

- (経験) は、非過去形にしても過去形にしても、テンス的な意味がかわらないので、テンス的な意味を積極的にはあらわしていないようである。両者のちがいは、まだよくわからない。
- (ときどき) は、絶対的テンスとして実現する。非過去形は、現在またはひろげられた現在のことをあらわし、過去形は、過去のことをあらわす。

(158)

- ・(必要)は、テンス的には絶対的テンスとして実現するが、ムード的に評価の意味がつけかわわる。使用の面からみると、非過去形は、「スルナ」「シナイデオコウ」につながる態度表明の要素がかわわり、過去形は、残念さの態度表明の要素がかわわる。

注

- 1) カテゴリゼーションの形式名詞の概念は、高橋1979の「VI 形式名詞への移行」による。
- 2) 国語研1985では、いわゆる「経験・記録」の用法を、第VI部第1章で「現在以前の動作やできごとの質化」ととらえているが、やはりパーフェクトの一種としてとらえたほうがよいだろう。perfectは、“Spring has come.”が、いまよりまえに春がきたことと、いま春であることの両方をあらわすように、ふたつの時間にかかわっている。
- 3) 現在筆者ののもとに「シテイル」形式のデータがあまりないので、今後あらためて「シタコトガアル」との比較をこころみたい。
- 4) 鈴木重幸1972は、第2部第7章の「(193すぎさらず)」で、つぎのようにかいている。

すぎさらずの意味には、なお派生的な意味として、特定の時間にかかわりのないことをしめすもの(超時間, 一般的, ひろげられた現在などとよばれる)がある。
- 5) 高橋1986は、「2 過去の特定時に成立したモノゴトの特性をあらわすばあいの過去形と非過去形」のなかでこの問題にふれている。
- 6) 高橋1983は、連用機能がもたらすいろいろな問題ととりくんでいる。

文 献

- 鈴木重幸 1972『日本語文法・形態論』(むぎ書房)
- 国立国語研究所 1985『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』(同所報告82, 秀英出版)
- 高橋太郎 1979「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」(言語学研究会『言語の研究』むぎ書房; 高橋1994に採録)
- 高橋太郎 1983「構造と機能と意味—動詞の中止形(～シテ)とその転成をめぐって」(『日本語学2-12』; 高橋1994に採録)

ダブルテンスの観点からみた<スルコトガアル>の種々相 (159)

- 高橋太郎 1986「形容詞のテンスについて」(宮地裕編『日本語研究(1)現代編』明治書院；高橋1994に採録)
- 高橋太郎 1993「ダブルテンス研究のすすめ」(『立正大学国語国文29』)
- 高橋太郎 1994『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失』(むぎ書房)
- 高橋太郎・屋久茂子 1984「～が ある」の用法(国立国語研究所報告79『研究報告集5』)